

中川久定著

自伝の文学

—ルソーとスタンダール—



岩波新書



中川久定著

自伝の文学

—ルソーと タンダール—

中川久定

1931年東京に生まれる
1954年京都大学文学部フランス語学
フランス文学科卒業
専攻—フランス文学
現在—京都大学文学部助教授

自伝の文学

岩波新書(黄版) 71

1979年1月22日 第1刷発行 ©

¥ 320

著者	なか	がわ	ひさ	やす
	中	川	久	定
発行者	緑	川		亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

発行所 緑 岩波書店

電話 03-265-4111

振替 東京 6-26240

印刷・理想社 製本・永井製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目 次

I 自伝の理論的諸問題 1

1 自伝という言葉 2

2 自伝の定義 9

II ルソーの自伝 21

1 『告白』の成立と意図 22

2 『告白』の方法 38

3 『告白』の闇と光 54

4 ルソーの自伝と永遠の現在 67

III	スタンダールの自伝	93
1	スタンダールと自伝	94
2	『エゴチスムの回想』	108
3	『アンリ・ブリュラールの生涯』の意図と方法	126
4	『アンリ・ブリュラールの生涯』と「完全な幸福」	149
IV	ルソー、スタンダールと自伝	171
1	ルソー、スタンダールの自伝の成立	172
2	ヨーロッパにおける近代自伝の成立	179
	おわりに	187
	—— 自伝とはなにか ——	
	あとがき	191

I

自伝の理論的諸問題

1 自伝という言葉

ヨーロッパの自伝

自伝の文学の問題を、ヨーロッパの二人の文学者ルソーとスタンダールの作品に即して考えてみたいと思います。

ヨーロッパの自伝の文学を問題にしようとしたしますと、話の材料になることは非常にたくさんございます。自伝というジャンルでまず考えられます作品には、五世紀初めのアウグスティヌスの『告白』がございます。それからたとえばドイツを考えてみますと、一九世紀前半のゲーテの『詩と真実』があり、イタリアでは一六世紀のベンヴェヌート・チエッリーニの『自伝』(原題『生涯』)がございます。アメリカでは一八世紀末のフランクリンの『自伝』(原題『回想録』)は誰でも思い浮かべるものですし、イギリスになりますと、ここでは『詩と真実』に比肩されるような自伝はありませんけれども、たとえば一八世紀のギボンの『自伝』(原題『回想録』)、あるいは一九世紀半ばすぎのミルの『自伝』(原題『私の回想録私の生涯と思想』)などは誰でも思い付く有名な作品です。

ところがこういうヨーロッパ全体を考えてみましても、自伝というのは非常に莫大な量がございますし、時代的にいっても中世から現代まであり、話をフランスだけに限定いたしましても、私の主題のルソーとスタンダール以外にも、たとえばシャトーブリアンの『墓の彼方の回想録』といわれるものとか、ルナンの『幼年時代と青年時代の思い出』、あるいはジッダの『一粒の麦もし死なずば』とか、あるいはミシェル・レリスの『成熟の年齢』、あるいはサルトルの『言葉』とか、ボーヴォワールの皆さまご承知の一連の作品『娘時代』、『女ざかり』、『或る戦後』、『決算のとき』とかがございます(ボーヴォワールの作品の題名は、すべて日本で刊行されている訳名によります)。そのほかにフランスの自伝といたしましては、ルソーより少しあとになりますが、最近日本でも翻訳がたくさん出ましたレチフ・ド・ラ・ブルトンヌとか、フランス革命の頃に活躍しました女性、ロラン夫人の自伝とか、あるいはジョルジュ・サンドの自伝、あるいはもっと新しいところではロマン・ロランとか、ジュリヤン・バンダとか、フランソワ・モーリヤックとか、そのほかにも大勢のひとの自伝がございます。

話の焦点

それでこういう膨大な領域を覆った問題を限られた範囲内で扱うことはとても不可能ですので、話の拡散を防ぐために、ヨーロッパの社会において、近代的な自

伝というものが出てきた最初の形態に当たるルソーと、その少しあとにくるスタンダールに対象を限定して話を進めていきたいと思います。ルソーの自伝作品として取りあげますのは『告白』と『孤独な散歩者の夢想』で、これは両方とも岩波文庫に翻訳がございいます(前者は桑原武夫訳、後者は今野一雄訳)。それからスタンダールでは『エゴチスムの回想』、これは岩波文庫には翻訳がございませんが、富山房百科文庫のなかに入っております(富永明夫訳)。それとこれは岩波文庫に入っている『アンリ・ブリュールの生涯』(桑原武夫・生島遼一訳)。こういうところに焦点をしばってみて、一八世紀から一九世紀初めにかけて、ヨーロッパの自伝文学はどういう形態を取って生まれてきたかという問題を考えてみたいと思っています。まず全体のプログラムめいたことを申しあげますと、初めに、自伝というのは一体どういうものを指すのかということをお話したいと思っています。自伝の定義の問題です。そのあとルソーを取りあげて、ルソーの自伝の特徴をお話したいと思っています。それから次にスタンダールの自伝の特徴はどういうものかということをお話して、最後に結論的に、なぜひとは自伝を書くのかということを考えてみたいと思います。ただし、なぜひとは自伝を書くかと問う場合でも、ある作家が、個人としてなぜ自伝を書きたかったのか——あるいはなぜ書かざるをえないかという必然性を自己の心のうちに感じたのか——という問題、つまり個

人心理的な問題と同時に、自伝という文学のジャンルが、なぜその作家をとおしてその時代
に出現してきたのかという問題、つまり歴史的な問題を、できれば重ね合わせたような形で
考えてみたいと思っています。

自伝とい
う言葉

まずこの自伝という言葉ですけれども、これはフランス語ではオートビオグラフ
ィー (autobiographie) と申します。私はいま自伝という日本語を使っております
けれども、昔は自叙伝という言葉のほうがよく使われておりました。これは中国
の自叙からきた言葉ですね。自叙伝という言葉は日本語の辞書のなかでどういうふうに定義
されているのか、岩波書店の『広辞苑』(新村出編)を引いてみますと、「自叙」という見出しの
項目のなかに「(自叙伝)自分で書いた自分の伝記。自伝」という説明があり、また「自伝」
という項目には「自ら書いた自分の伝記」という定義があり、そのあとに「自叙伝」と書い
てありました。もうひとつ『新潮国語辞典』を引いてみました。これは山田俊雄さんと築島
裕さんが編集されたものです。これには「自叙伝」という項目の所に「自分で書いた自己の
伝記」という定義が与えられております。また「自伝」という項目もありまして、そこを引
くと「自叙伝の略」となっています。このように、日本語では自叙伝と自伝の両方が使われ
ておりますが、現在では「自伝」という簡単な言葉のほうが頻繁に用いられているように思

いますので、これからは自伝という言葉を使うことにいたします。

ではこの自伝という言葉に相当するヨーロッパ語は、いったいいつ頃から出てきたのでしょうか。まず初めはイギリスで、一八〇〇年頃オートバイオグラフィ（autobiography）という言葉が登場してきます（OED〔The Oxford English Dictionary〕によりますと、一八〇九年からということです）。それがすぐにドイツに行つて、英語とほぼ同じ頃から使われ出してあります。フランス語では一九世紀の半ば、一八五〇年頃にはすでにもう市民権をえた言葉になっておりまして、文学のひとつのジャンルをあらわす用語として定着しています。

もう少し詳しいことを申しますと、一八六六年に『一九世紀総合大辞典』（*Grand Dictionnaire universel du XIX^e siècle*）とでも日本語で訳せるような辞書が出ましたが、その第一巻目に「オートバイオグラフィ（autobiographie）」という項目がございます。そこを引いてみますと、ほぼこういう趣旨のことが書いてあります。——長い間イギリスとフランスでは有名な政治家、文学者、芸術家が自分の生涯に関して書き残した物語あるいは思い出のことをメモワール（*mémoires*）という名前で呼んできた。しかしやがて英語にオートバイオグラフィ（autobiography）という言葉が出現するに及んで、今度はそちらのほうが使われるようになってきた。このオートバイオグラフィ——フランス語ではオートバイオグラフィ——というのはどうい

うものかという、それは出来事や事件を描き出すよりも、むしろその出来事や事件のなかで生きていた自分、主体として行動した自分そのものを書くような種類のメモワールのことを指す、とこういっております。

なおこの『一九世紀総合大辞典』の項目は続けて、こうのべています。——もちろん回想録、つまりメモワールと呼ばれているもののなかにもオートビオグラフィ的な部分は含まれている。しかしその場合でも作者個人の歴史よりもむしろ同時代の出来事のほうに主眼が置かれている。だからたとえ自伝的な要素が含まれていても、話の焦点が同時代の事件の側に向けられている作品に関しては回想録（メモワール）という言葉で呼んだほうがいいのだ、といっております。

いま申しあげましたようにフランス語ではだいたい一八五〇年頃からこのオートビオグラフィという言葉が出てくるわけですが、それまでは自伝という言葉でどういふ言葉であらわしていたかと申しますと、先の辞典のなかにもありましたように、だいたいメモワール、回想録、あるいはメモワール・ド・マ・ヴィー、私の人生の回想録とか、スーヴニール・ド・マ・ヴィー、私の生涯の思い出（追憶）という言葉が使われたり、あるいはたんに、私の生涯、マ・ヴィーとか、生涯、ラ・ヴィーというふうに呼ばれたりしております。

オートビオグラフィ
のさまざまな意味

このオートビオグラフィという言葉が市民権をもってフランス語のなかに登場してきたあと、つまり一八五〇年頃からあと、オートビオグラフィのなかにどういう種類の作品が含まれているかということを考えてみますと、まずこの言葉を一番広く取った場合、自分について語った作品は全部オートビオグラフィのなかに含めるという使い方があります。たとえば一九四九年から六七年にかけて七巻本で出ましたデイルタイの弟子の文化哲学者ゲオルク・ミッシュ(Georg Misch)というドイツ人が書いた本で『自伝の歴史』(*Geschichte der Autobiographie*, Frankfurt am Main, Schulte und Bulmke, 1949-1967, 7 Bde.)というものがつづきます。このなかでは自伝という言葉はそういう広い意味で使われております。ですからこの定義によれば、ほとんどあらゆる文学作品が自伝のなかに入るといっても過言ではありません。この自伝という言葉をそれよりももう少し狭い意味に限定した使い方もございます。たとえば筑摩書房から『誠実』と『ほんもの』(*Sincerity and Authenticity*, Cambridge Massachusetts, Harvard University Press, 1972)という題で野島秀勝さんの翻訳が出ましたアメリカのライオネル・トリリング(Lionel Trilling)の本があります。これは一種の自伝論なんですけれども、そのなかでは、自伝という言葉は、ほぼ自意識の表現というような意味で使われております。

自伝をそういうふうな意味に取りますと、当然そのなかには作者の自意識を強く表現した対話体の小説であるとか、純然たる小説までもが含まれてしまいます。ですからトリリングは、この本のなかで、ディドロの対話体の小説『ラモーの甥』とかオースチンの小説『マンスフィールド・パーク』などを、ひとしく自伝文学として論じているわけです。このトリリングにならうていえば、日本ではたとえば、夏目漱石の作品はほとんどこの自伝のなかに入るでしょうし、森鷗外の作品もそのかなりの部分がそこに入るといえることになるように思います。この自伝をトリリングの使っているような意味よりももう少し狭く取ってみますと、日記と回想録——出来事に関する回想録と自分自身に関する回想録——を含むような用例が見いだされます。

2 自伝の定義

自伝の定義

こういうふうに、自伝という言葉の定義については、ひとによって非常な幅があります。ですからここで自伝という言葉でなにを指すかということをまず最初に一応定義することから始めていきたいと思います。

自伝の理論的研究は、最近のフランスでは特に急速に進んできております。自伝というのは要するに物語の一種ですけれども、物語の研究はフランスではもっとも発展している文学研究の領域のひとつであります。手近に皆が利用するロベールのフランス語小辞典——私の手もとにありますのは、その一九六七年版ですが——これを引いてみましても、まだこの物語研究という言葉、レシトロロジー(récitologie)とかナラトロロジー(narratologie)とかは収録されておりませんが、近頃の文学研究の本のなかではこの言葉に頻繁に出会います。

こういう物語研究と並んでテクストの構造分析もまた非常に進んできております。この物語研究・構造分析の立場から自伝を研究しているひとにフィリップ・ルジュンヌ(Philippe LEJEUNE)というフランス人がおります。このひとはパリ第一三大学のまだ若い講師(maitre-assistant)ですが、そのひとが一九七五年に自伝に関する研究で『自伝契約』(*Le Pacte autobiographique*, Paris, Seuil, 1975)という題の本を出しました。この本のなかにある自伝の定義が、私が今まで知っている限り一番精密な定義ですので、それから紹介していきたいと思えます。

参考資料(1)の「自伝の定義」をご覧ください。これがルジュンヌによる定義であります。

參考資料(1) 「自伝の定義」

1 言語の形態

(a) 物語

(b) 散文

2 主題 一個人の生活、一人物の歴史

3 作者の状況 作者と話者とは同一人(作者の名前は実在の一人物に関連する)

4 話者の位置

(a) 話者と主要人物とは同一人

(b) 物語の回顧的展望

まず最初に、1「言語の形態」という項がありますが、自伝の定義として考えられるのは、それが物語であること、ついで散文で書かれていることです。ここで次の項の説明に入ります前に、ルジュンヌの自伝の定義のなかで、非常に大切な意味をもっております三つの概念について、あらかじめ説明しておきたいと思えます。それは、「作者」、「話者」、「主要人物」という三つの概念であります。

話があまり抽象的にならないように、ルソーの自伝『告白』のテキストを読みながら考えていきましょう。まず『告白』の正式の表題から申しあげますと、これは『Ｊ・Ｊ・ルソーの告白』となっております。そして序文に続く第一巻冒頭の部分は、原文を直訳してみますと、次の言葉で始まっています。この本のずっと先にある参考資料(5)の冒頭の節をご覧ください(三三ページ)。「私はこれまで決して例のなかった、そして今後も決して模倣するひとがないような仕事を試みる。私は自分と同じ人間仲間に、ひとりの人間を自然のままの真実において見せてやりたい。そしてその人間というのは私である。」

さてこの表題のなかには、「Ｊ・Ｊ・ルソー」という実在の人物の名前が出てきます。これが「作者」であります。それから次に読んだ参考資料(5)の冒頭のテキストのなかには、「私は」で始まる文が二つありました。この「私は」が「話者」に当たります。この『告白』という作品の話を進めていくひとですね。それからテキストの最後は「その人間というのは」——つまり「話者」である「私」がこの作品のなかで描き出そうとしている人間は——「私である」という言葉で終わっています。改めて説明するまでもなく、これは『告白』が描き出すのは、すなわち『告白』の「主要人物」はやはりルソー自身、つまり「私である」という宣言になっているわけです。この『告白』の表題と次に見た短いテキストのなかに、